

# □ 吹奏楽

## 中 橋 愛 生

### ■プロフェッショナル吹奏楽団

2014年はプロフェッショナル吹奏楽団の新規設立が目立った。2月11日には岡山で日本ウインドアンサンブル（通称：桃太郎バンド）がデビューコンサート。この団体は作曲家の鈴木英史を総監督としクリニックも積極的に行う活動が特徴。5月17日には横浜クラシック音楽振興協会を母体とする横浜ベイ・ウインドオーケストラが、同日に静岡ではレヴォリュション・ウインド・アンサンブルがデビューコンサートを行っている。また、この日には日本では珍しいファンファーレ・オーケストラ形態によるプロ団体となるシンフォニックファンファーレ東京も立ち上げ公演を行っている。さらに5月22日には東京でジャパン・ウインド・プレイヤーズがデビュー公演、CDも販売した。これまでもプロを名乗る団体は数多く存在するが、実態を伴っているところは多くはない。今年誕生した各団体がどれほど継続し、周知され、影響力を持つに至るかを注視したい。

その他の団体では、シエナ・ウインド・オーケストラは1月の定期演奏会でイギリスの作曲家フィリップ・スパークを客演指揮で招き自作自演のプログラム。九州管楽合奏団は5月の定期演奏会でオランダの作曲家ヨハン・デ＝メイ（来年度より首席客演指揮者に就任）を招き、フィルハーモニック・ウインズ大阪は9月にベルギーの作曲家ヤン・ヴァンデルローストが首席客演指揮者に就任したのを記念した公演を行っている。このようにヨーロッパの人気作曲家を指揮者として招く、というのが目に付く。一方で東京佼成ウインドオーケストラは正指揮者として大井剛史を起用、4月にその指揮で定期演奏会を行っている。大阪市音楽団の一般社団法人化されて初となった6月の定期演奏会はアメリカを拠点とするシズオ・Z・クワハラが指揮による。こうした指揮者に対する各団体のスタンスの違いが面白い。5月には東京佼成ウインドオーケストラ、シエナ・ウインド・オーケストラ、大阪市音楽団の三団体の選抜メンバーによる合同バンドが「題名のない音楽会」50周年企画として演奏を行ったのも注目のトピック。

自衛隊のバンドは、陸上と海上は後述する海外公演が目立つ。航空自衛隊は今年が創設60周年であったことから全航空音楽隊からの選抜メンバーによる記念演奏会を6月28日にすみだトリフォニーホールで開催。

### ■イベント

2月1日に日本ジャズ協会21の主催により第1回全日本ポップス&ジャズバンドグランプリ大会が練馬文化センターにて開催。昨年も2つのポップスのコンテストが新たに立ち上がったが、これらの競合・住み分けが気になる。3月8日と9日には7回目となる「バンド維新」が浜松市文化振興財団の主催によりアクトシティ浜松中ホールで開催され8人の作曲家が新作を発表。3月16日には文京シビックホールで第17回「響宴」を開催、15曲の未出版邦人作品が演奏され、ライヴCDが発売された。響宴では今年から「スクールバンドにとって有益なレパートリーの提供」を目指したスクールバンド・プロジェクトが始まり、高橋宏樹と高橋伸哉の二人の同プロジェクト委嘱作品が初演。7月2日が日本の吹奏楽界に多大なる貢献を果たした指揮者フレデリック・フェネルの生誕100年であったため、

これに関連するイベントが随所で行われた。特に4月19日にJWECC（日本管楽合奏指揮者会議）で行われた特集、12月9日に東京佼成ウインドオーケストラの新旧団員を中心に所縁の人たちで自主公演として行われたメモリアル・コンサートが目玉を引いた。

### ■海外との交流

今年日本の吹奏楽団の海外進出が活発だった。5月には5日から一週間の日程で海上自衛隊東京音楽隊がノルウェー・タトゥ（軍楽祭）2014に参加。7月下旬には国立音楽大学バスオルケスターが東南アジアツアーを行い、タイ、シンガポール、ベトナムの三国を巡っている。7月26日から8月5日にかけては陸上自衛隊中央音楽隊がフィンランドに渡り、ハミナ・タトゥに出演。8月に行われた第19回韓国済州島国際ウインドアンサンブル音楽祭では福岡県立嘉徳高校が、12月にアメリカ・シカゴで行われたミッドウエスト・クリニックでは埼玉栄高校が、それぞれ単独のステージを持っている。アンサンブルとしても、3月にプラス・ヘキサゴン（外園祥一郎らによる金管六重奏）がスペイン公演を行い、8月にはロンドンで行われた第46回国際ホルン・シンポジウムへの笛集団が参加を果たしている。

外来の団体では、5月23日にジュリー・ジャンキン指揮によるテキサス大学ウインドアンサンブルが世界一周ツアーの一環として岡崎で公演を行った。これはJWECCの一部として開催されたもの。同団は25日には洗足学園音楽大学のコンサートにもゲスト出演している。6月末から10月頭にかけては「プラスト！」が日本ツアーを行う。2年ぶり8回目の来日となった今回は47都道府県全てで公演を行う充実ぶり。アンサンブルも多数来日。主立ったところでは1月にロンドン交響楽団プラス・クインテット、2月にクラリノッティ（クラリネット三重奏）、10月下旬にレ・ヴァン・フランセ（木管五重奏）、11月にカナディアン・プラス、といったあたりが話題となった。ソリスト単位だとさらに数が増えるが、吹奏楽系メディアで紹介されたもので特に注目すべきものを挙げると、3月にミシェル・ベッケとヨルゲン・ファン・ライエンのデュオ（トロンボーン）、6月にブライアン・ボーマン（ユーフォニアム）、7月にラモン・オルテガ・ケロ（オーボエ）、9月にハイッツ・ホリガー（オーボエ）、11月にマティアス・ヘフス（トランペット）、12月にラデク・パボラーク（ホルン）、といったところか。

### ■その他の話題

芸術ウインド・オーケストラ・アカデミーが始動。これは東京芸術劇場が東京佼成ウインドオーケストラと上野学園大学の協力により立ち上げたもので、選ばれた人員をレッスンや講習などで教育、優秀者には東京佼成ウインドオーケストラのコンサートにエキストラ出演するなど経験を積ませ、プロフェッショナルの吹奏楽奏者を育成する、という企画。7月にオーディション、9月よりアカデミー開始、12月にアンサンブル・コンサートと順調に滑り出しており、来年の初の吹奏楽公演に期待が高まる。

ドイツのCDレーベルNAXOSは数年前より吹奏楽のシリーズを開始したが、そこに日本のバンドが音源を提供。2月にはフィルハーモニック・ウインズ大阪がヤン・ヴァンデルロースト作品集を、12月には洗足学園音楽大学アンサンブル・ヌーボーが自団体作曲作品集を、それぞれリリースした。CDといえば2月には精華女子高等学校吹奏楽部のアルバムがオリコンクラシック部門で初登場1位となったのが大きな話題となる。

12月のミッドウエスト・クリニックにおいて、日本の吹奏楽楽譜および録音の最大手であるブレーン社の村上健社長ほかが国際賞を贈られる。日本の吹奏楽が世界に認められた証左であり、喜ばしい。一方、5月10日に吹奏楽ポップスの父とも呼ばれた岩井直博氏が90歳で死去。一つの時代の終わりも感じる。